

のいわゆる “bisection of angle technic” や、三角形の定理を応用した Cteszynski の “Isometrie Regel” が 1907 年に紹介されている。Raper は、二等分法の積極的な支持者で、1907～1917 年にかけて、独自の標準照射角を発表している。平行法は、1920 年 McCormack により、管球を 24～40 インチ離して照射する “long distance technic” が発表され、1947～1950 年の間に発表された Fitzgerald の “long cone paralleling technic” により完成した。咬翼法については、初期に上下の歯牙が同時に写っているものがあるが、これは意図的なものでなく、1924 年に咬翼用フィルムを考案した Raper を起源とする。

2. X線透視装置

X線と蛍光に関して研究している者もいた。Edison は、8,500 もの材料からタングステン酸カルシウムを見つけ、蛍光スクリーンを利用した “fluoroscope” を 1896 年に考案した。この装置を使って 1900 年に Kassabran は人体の透視を行っている。さらに、X線量の判定にも、この “fluoroscope” が使用されていた。その際、X線防護には余り注意は払われていなかった。1896 年に、Rollins は、デンタルミラーの形をした “intraoral fluoroscope” を考案している。最初期にはその簡便性で利用されていたが、X線の危険性の認識が高まるにつれ、装置の高性能化に伴い使用されなくなった。

3. わが国における歯科X線診断とX線装置・X線発生実験

わが国でのX線発生実験は、昭和 29 年に 4 組成功させている。水野敏之丞ら、丸茂文良ら、村岡範為馳ら、山川健次郎らである。なかでも村岡は、島津源蔵作製のウイムシャースト感応起電機を電源として成功している。さらに、島津製作所は明治 42 年実用的な国産初のX線装置を作製している。また、大正 12 年 3 月、同社主催の第一回「歯科レントゲン講習会」が開かれ、3 日間の日程で歯科関係者 63 名が受講している。歯科X線診断については、明治 42 年、遠藤至六郎の「歯科診断上におけるX線の価値について」と題する論文があり、歯科学報に掲載されている。この論文は、歯科X線診断において、わが国で最初に自らが診断し発表したものである。

22) 明治時代の小児科学書「児科必携」にみられる歯科口腔疾患の内容

Contents of Dental and Oral Diseases in “Essential Pediatrics” Published in the Meiji era

日本大学松戸歯学部 ○佐久間 優
渋谷 鉦
石橋 肇
落合 俊輔
向井 康子
谷津 三雄

Yutaka Sakuma, Koh Shibutani, Hajime Ishibashi, Shunsuke ochiai, Yasuko Mukai and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

演者らの一人谷津が架蔵する弘田 長著「児科必携全」は第 6 版と第 14 版の二冊である。本書の初版は明治 21 年 10 月、第 2 版同 24 年 10 月、第 3 版同 27 年 3 月、第 4 版同 30 年 8 月、第 5 版同 32 年 6 月、第 6 版同 34 年 3 月、第 7 版同 35 年 12 月、第 8 版同 38 年 7 月、第 9 版同 39 年 12 月、第 10 版同 40 年 11 月、第 11 版同 42 年 3 月、第 12 版同 44 年 12 月、第 13 版大正 4 年 11 月、第 14 版大正 6 年 8 月刊からみて当時のベストセラーの小児科学書と思われる。第 6 版の 494 ページに対し第 14 版は 678 ページと 184 ページも増補されていることから版を重ねるごとに学界の進歩に従い増補したことを知る。

第 1 篇は総論で第 1 節の本邦小児科歴史では漢法医河内全節氏の「日本兒科史」から引用している。第 2 節生理略論、第 3 節診断、第 4 節療法概則、第 2 篇初生兒ノ疾患、第 3 篇神経系諸病、第 4 篇呼吸器系諸病、第 5 篇循環器系諸病、第 6 篇消化器系諸病、第 7 篇泌尿生殖器諸病、第 8 篇伝染病、第 9 篇全身病、第 10 篇眼、耳及皮膚病からなっている。

生理略論の「歯」の項に「小兒ノ生齒期ヲ別テ前後二回トス、其第一生齒期ハ生下八ヶ月前後ニシテ栄養善良ナル小兒ノ歯牙発生ハ栄養不良ノ者ニ比スレバ早く且順正ニシテ列序ヲ乱サズ、今其生齒期及其順序ヲ左ニ掲グ。6ヶ月乃至9ヶ月：下顎内門歯ヨリ始マリ上顎内門歯ヲ生ジ続テ上顎

外門歯ヲ生ジ、遂ニ下顎外門歯ヲ生ズ。12ヶ月乃至15ヶ月：第1小白歯4箇。18ヶ月乃至20ヶ月犬歯4箇。20ヶ月乃至24ヶ月：第2小白歯4箇。4年半乃至5年ニ至テ更ニ4箇ノ第1大臼歯ヲ生ズ（後來交換セズ）而シテ第6年乃至第7年ノ頃（第2生歯期）ニ至テ更ニ前記諸歯ノ交換ヲ始ム」と記されている。

第6篇消化器系諸病の第1節は口腔諸病で、(1)口粘膜加答兒は今日のカタル性口内炎と思われ「若シ齲齒ノ刺戟等ニ由テ発シタルトキハ宜シク之ヲ拔去シ」、(2)アフター性口粘膜加答兒には「7ヶ月以上3年以下ノ小兒即生歯期ノ者最モ多ク間々同時ニ数兒ノ之ニ罹ルコトアリ。故ニ伝染性ヲ有スルノ説アリ。其他胃加答兒、急性伝染病等ニ併発スルコトアリ」、(3)第6版での口粘膜腐爛は第14版では腐爛性口粘膜炎と変わっている。「最モ栄養ニ注意スルコト緊要ナリ。局所ノ療法トシテハ極メテ口腔ヲ清潔ニシ塩酸加里ヲ含嗽セシム」、(4)水瘡は「頬粘膜ニ迅速ニ周囲ヘ其軟部ト骨質トヲ問ハズ蔓延スル一種ノ壊疽」、(5)驚口瘡は「本病ハ一種ノ黴菌口腔粘膜ニ発生シ為メニ発シタル症ニシテ能ク伝染スルノ性ヲ有ス」、(6)生歯困難は「生歯ハ生理的作用ニシテ恰モ婦人ニ月経分娩アルガ如ク其際身体ニ異変ヲ起サザルハ勿論ナレドモ亦時トシテ之ニ因テ健康ヲ損スルコトナキニアラズ。之ガ症状トシテ算ヘラレタルハ凡ソ左ノ如シ。啼泣過多、睡眠不穩、唾液溢流、微熱、口粘膜加答兒、……、全身痙攣等ナリ。是等ノ症状ハ生歯期ノ小兒ニ発シ生歯アリテ始メテ緩解シ、全ク生歯ノ結果トシテ発シタル症状ト認メラレタルモノナリ」とある。(7)舌上皮ノ剝脱症は地図状舌のことで「其原因ハ未ダ詳ラカナラズ」とかかされている。

23) 智児曼斯（チルマンズ）氏外科総論 にみられる麻酔的事項

Contents of Anesthesia in “Tillmans, Allgemeine Chirurgie (translated into Japanese)”

日本大学松戸歯学部 ○石橋 肇
渋谷 鉦
吉井 秀鑄
山口 秀紀
佐久間 優
谷津 三雄

Hajime Ishibashi, Koh Shibutani, Hidetoshi Yoshii, Hidenori Yamaguchi, Yutaka Sakuma and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

著者らの一人谷津が架蔵する本書は明治39年9月4日発行の第5版で、巻之壹412ページ、巻之貳451ページ、巻之參424ページ、全1,677ページからなり、初版は明治30年3月、第2版は明治31年10月、第3版は明治36年5月、第4版は明治37年10月刊で、当時のベストセラーの外科総論と思われる。本書はドイツのライプチヒ大学教授ヘルマン・チルマンズ外科総論の第5版を田代義徳が訳述したものである。本書の表紙には概目が記され、文中の主要な箇所には黒丸が印され、読者にとっては大変に便利なものであったと思われる。

巻之壹は緒論 外科學ノ研究、外科學ノ歴史、近世外科學ノ發達、第一篇外科手術法通論、第二篇外科繃帶術通論、第三篇外科病理學及療法通論の第一章炎症及損傷汎論の第五十八項まで、巻之貳はその続きと第二章軟部ノ損傷及外科病、巻之參はその続きと第五章腫瘍論で終っている。

緒論に「斯ノ學術ハ近ク三十年以内ニ於テ驚クヘキ廣大迅速ノ發達ヲ遂ケ從前曾テ達シ得サリシ所ノ高巔ニ陟レリ」と記し、今日の外科学の發展を予見している。さらに、第三項「近世外科學ノ發達」では「本世紀ニ於ケル新外科學ノ最モ重要ナル成功ハ麻酔法應用ノ發明ニシテ手術的外科學ハ之ニ由テ豫想外ノ發展ヲ得タリ」とある。そこで、今回、演者らは本書にみられる麻酔法について報告した。